

神長善次大使著「欧州の知恵―世界に生きる新しい日本の対応―」

講談社 1992年4月20日刊を読む

1. 日本の精神的土壌とは何かを考える

(1) 日本的土壌には、文明志向の土壌がある。学問、教化をを盛んにし人知を明らかにするとの志向である。この志向は、技術や学問を導入し、それを高からしめる努力に通じる。またその過程が精神の修養をも必要とさせ、ついには極意を得る心境に至らしめるのが、きわめて日本的である。戦後の日本の経済成長、そして今日のわが国を築いた土壌の一端がここにある。この文明志向には、欧米に見られる神の摂理や神の摂理の下での進化論といった宗教的色彩が見られないのも特徴的である。

(2) 次に善の思想に触れたい。自らを善かれとし相手にも善かれと思弁する。それが仏教的なのか儒教的発想なのかどうかは知らない。が、正しく、上手で、立派で、親しくして、快く、慈善を積み、仲よくするという善の思想がある。善処、善行、善政、善隣、親善といった発想の源である。慈悲心なる思想・心境は、この善の思想と仏教的思想の融和から生れたものではないだろうか。生命を有する万物とわれわれ人間とは無縁ではない。それ故に万物に哀れを感じ慈しむ心いつくが生まれる。自己主張により相手を攻撃するというよりは、むしろ相手を思いやるのである。

(3) 日本的特質として最も多く言及されるのは、和わの思想であろう。聖徳太子の十七条憲法は、この思想を中核に据えたが、それは紛争解決の手段としての和の貴さに言及したものである。和の思想はまた融和、協和、和親、和睦、和平に通じ、平和をもたらす和なのである。今日に至るも、この和を尊ぶ精神土壌ないし風潮は衰えていない。

P.133 ~ 134

- 2009年6月19日林明夫記 -